

現代倫理道德研究会（平成 30 年 5 月 9 日）発表要旨

## 「徳」をどう説くか？ — 徳の比較文明論

生命環境研究室  
教授 犬飼孝夫

はじめに「徳」と “virtue” という言葉の辞書的定義と、廣池千九郎がこれらの言葉を『道德科学の論文』の中でどのように説明しているか確認した。また、モラロジーのテキスト類の中で「徳」という概念がどのように説明されてきたかについても確認した。

続いて、『ニコマコス倫理学』および『政治学』に見られるアリストテレスの「徳」論について概括し、ユダヤ・キリスト教における「徳」概念との比較を試みた。また、ジョナサン・ハイトの『しあわせ仮説：古代の知恵と現代科学の知恵』（新曜社、2011年）を手がかりに、古代の文書に共通して見られる「徳」概念について論じた。さらに『グローバル時代の幸福と社会的責任：日本のモラル、アメリカのモラル』（麗澤大学出版会、2012年）を手がかりに、日米における「徳」に関する考え方の違いを明らかにした。

最後に、廣池千九郎が「積徳」や「陰徳」を重視していたことを指摘し、『和語陰陽録』や石田梅岩、中江藤樹の著作を紹介しながら、積徳や陰徳を重視する思潮が江戸時代の日本に広まっていたことについて論じた。また、廣池が「自分が幸福になる」ために徳を積むという考え方は利己心に基づくものであるとして否定し、過去における道德的負債を返済し、自己の品性を向上させるという目的のために徳を積むという姿勢を重視していたことを指摘した。